
Beach Soundの恋～佐伯,永久のその後～

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beach Soundの恋〜佐伯 永久のその後〜

【Nコード】

N0303P

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

大学4年生になった永久は、恋人の佐伯に同居を進められるが、頑なに拒んでいた。そんな永久の前に、美桜という人物が現れて・・・?!

その1（前書き）

この物語は、前作の Beach Sound の恋、で描いた佐伯と
永久のその後、を描いたものです。

少しでも楽しんで頂ければ幸いです・・・> m (——) m <

その1

「なんでだ？」

詰問口調でそう言われても頷くわけにはいかない。

「永久は俺の事が好きじゃないのか？」

一転、悲しそうな口調で言われて、ますます困ってしまった。

視線を佐伯 音羽おしほに向ける。そうして盛大に溜め息を吐いた。

「佐伯さん、ダメ」

「音羽」

言葉が続けようとしたのに佐伯のぴりつとした声に阻まれる。

名前で呼べ、という事だ。想いが届いたあの日、確かに名前で呼べと言われ、渋々了承したけれど、約3年の月日が流れてもなかなか慣れない。ついつい苗字で呼んでしまい、その度にこうやって訂正させるのだった。

「・・・音羽さん、兎に角ダメです」

溜め息と共に呟くと、佐伯の表情は満足感と寂しさが混ざりあった複雑なものになる。それに、少しだけスパイスのように苛立ちが含まれていた。

「永久はそんなに俺と一緒にいるのが嫌なのか？」

もう何度同じ言い合いをしてきただろう。

俺は今大学の四年生。つまり、もうすぐ卒業なのだ。そうして就職の時期・・・。

就職先は今のバイト先で Beach Sound。

その為に今アパートを探しているところであった。

「一緒に居たくない訳ではないんです。・・・そうじゃなくて・・・例えばですよ？一緒に住む、となったら音羽さんは俺から家賃とってくれないでしょ？」

覗き込むように佐伯の目を見て聞いてみる。

「当たり前だ。買ったマンションだぞ？お前から家賃をとるわけがない」

自信満々にそう言われて苦笑した。

「だから、ダメです」

意思を曲げるつもりは毛頭ない。

まだ何かを言おうとしている佐伯を横目に、話は終わりとばかりに座っているソファから立ち上がった。

「お前のその意思を曲げない所は、長所でもあるが今の俺には苦々しいよ……」

背後で佐伯の嘆息交じりの声があったのだった。

今日は日曜日で大学も休みだった為、俺は昼間からBeach Soundで仕事をしていた。

「因幡くん、これお願い」

昼間の店長である、美人で優しい如月ネイトウキの声で、俺は物思いから浮上する。

急いでシルバーのトレーに軽食のサンドイッチセットを乗せ、客席の間を縫うようにし目的地に到着した。

「お待たせ致しました。サンドイッチセットです」

そう言い、手早くテーブルにセットする。

その客は読んでいた単行本から視線を上げ軽く頭を下げると、サンドイッチを1つ摘み頬張った。俺は其れを見届けると、1つお辞儀をし如月のもとに戻る。如月はまってました、とばかりに笑みを広げ俺を手招きした。

「はい？」

笑顔がちよつと不気味で嫌な予感を覚えつつ、如月を見ると、その綺麗な顔が、子供の様に綻んでいた。

「音羽から聞いたよ。随分と嫌がっているみたいだね」

案に何を指して言っているのかわかった俺は苦笑する。佐伯と如月は学生の時分からの友人だ。話も筒抜けというものらしい。

俺は溜息を1つ吐き、如月の綺麗な顔を見詰めた。

「一緒に住むのが嫌なんではないんですよ？これからもずっと一緒に歩いて行きたいですし。．．．でも、だから余計に養ってもらおうような事はしたくないんです。．．．俺間違ってますかね？」

存外に真剣に応えると、如月の顔が苦笑に変わった。

「それ、僕が責められてみたいなんだけど？」

如月はオーナーの千葉と共に、彼の豪華なマンションに住んでいる。俺は急いで首を振った。

「それが、全部悪い事だなんて思っている訳じゃないですよ？！ただ俺には向いていないと思っただけで．．．」

すみません、と小さく謝ると、如月はプッと吹き出す。肩を揺すりながら笑う如月に、俺も頬を緩ませた。

「うそうそ、そんな風には感じないよ。．．．ただ、音羽の気持ちも解って欲しいんだよね。大切な人を近くで見守りたい、甘やかしたいと思うのは男の性だからね」

それはそうかもしれないが、やっぱり自分には無理なのだ。

「それは解ってます。．．．でも、俺1度もお金を出させてもらった事、ないんです」

引っかかっている事を口にする。

佐伯は解らない、というように、ん？と言って小首を傾げた。その動きで彼のさらさらな髪が揺れる。

俺は其れを眺めながら、言葉を紡いだ。

「その、一緒に出かける時も、食事をする時も、俺に払わしてくれないんです。俺はまだ学生だから良いんだって言って、今まで一度も．．．」

そこで言葉を切る。如月の形の良い眉が困ったように下がった。

「因幡くんは、甘えるのは苦手？」

一瞬如月が何を言っているのか理解できない。素直にそれが表情に

出てしまったのだらう、如月が苦笑した。

「ん〜・・・、確かに金銭の問題ってちょっと厄介だよな。でも、音羽は君よりずっと年上だし、君を守りたいっていう思いは強いと思う。勿論、君も好きな人を守りたいって気持ちがあるのはわかってる。でもお金を払う事だけがそれに当てはまるわけじゃないと思うんだ。少しでも側にいて、相手が心休まるようにするのも、守っている事になるんじゃない？・・・だから音羽に守らせてやってくれない・・・？」

目から鱗だった。そういう考えもあるのだ、と思うと今まで頑なに同居を拒んでいたのが馬鹿らしくなってくる。

ちらりと如月を見ると、満面な笑顔が向けられていた。

「・・・前向きに考えてみます」

それでも直ぐには、はい、と言えない。俺は苦笑を浮かべ、そう言及するのにとどめたのだった。

『そんな事で悩んでるの？』

携帯の向こうから呆れたような飯塚 慧の軽快な声がする。相変わらずだ、と苦笑が零れた。その向こうで、落ち着いた低い声が聞こえる。

『慧、因幡っちは真剣に悩んでるんだろ？しっかり聞いてやれよ』
柎 柎（ひこひな）の声に慧は、うるさいなあ〜と毒づきながらも、何処か嬉しそうだ。

柎は以前びーちさうんどにいたが、今は別の店の店長を任せられている。慧も当然のようについていった。

『良いじゃないか、養われたって。僕も如月さんとおんなじ考えだよ。お金だけじゃないもんね。』

綺麗な慧の笑顔が脳裏にうかんだ。つられて俺の口角が上がる。

『勿論側に居たいし、守って貰いたいし、その逆も当然じゃないか。』

だから、永久もうじうじしないで決断しなよ』
以外に強い後押しのように感じる。
決断……。しても良いのかな？そんな事を思った。

けれど、やっぱりあんなに嫌がっていたから、なかなか同居をOK
する事を言い出せない。

それに、今日は何時もと違っていた。

突然、新顔が居たのだ。何も聞いていなかった俺は戸惑う。

その子は今年20歳になったばかりだと言う。

茶色がかった髪は長めにカットされ、其れが顔を動かすたびにさら
さらと揺れるのだ。

慧とは違う、綺麗な顔立ちの彼は 羽生 はにゆう 美桜 みおとスタッフ全員の前
で、その綺麗な顔立ちに負けない位綺麗な声で自己紹介をしたのだ
った。

勿論教育係、というものが任命されるのだが、佐伯は其れを俺に任
命したのだった。

「永久。お前が面倒みる」

そう一言言い、業務がスタートする。

無理だ。俺に人を育てる事なんてできない、と思うけれど、スタッ
フ達は各々の持ち場に散って行き、佐伯もフロアーから姿を消して
しまった。そう言えば、昨夜オーナーの所に行くと言っていたのを
思い出す。

ふゝ・・・と息を吐きちらりと横を見ると美桜の綺麗な顔が、何や
ら不満げに歪んでいるのが見えた。

え？と思ったけれど、店はスタートしている。俺は自分に任された
任務を遂行すべく引き攣らないように注意しながら笑顔を美桜に向
けた。

「羽生くん、行きましようか？」

しかし、反応がない。顔を向けると、少し低い所から綺麗な顔が鋭

い視線を向けてきた。

え？

と思ったのも束の間、その顔が急に笑顔に変わる。

「大きなお世話。あんたに教わる気ないから」

笑顔のままそう言い放つと、フロアーに顔を向けそうして何時の間にか戻って来ていた佐伯の元へと小走りに近付きその逞しい腕に綺麗な手を這わせたのが見えた。

そうしてちらりとこちらに向けられた視線は、多分俺の見間違いではないはずだ。

これが俺の頭痛の種になるのだった。

その2

毎日のBeach Sound通いが苦痛に変わって行く。

大学がある為出勤時間はまちまちだけれど、店に向かう足取りが重いのは承知していた。

おまけに、佐伯と充分に逢えていないのも、憂鬱の原因でもある。オーナーの千葉は、最近は事あるごとに佐伯を呼びつけ、何やら用事を言いつけているらしい。

おかげで、休みの前の日には必ず逢瀬を繰り返していたのに、ままならない状態なのだった。

それに加えて美桜の存在が更に頭痛の種だ。

あの後、有言実行とばかりに俺の言う事は一切聞かずにいる。他のスタッフとはにこやかに会話を交わしたり、休みの日など何処かに出掛けたりしているらしいのだが、俺には全くもってなつかない。そうして元来人と交わる事が苦手な俺はどうすれば良いのかも解らないのだ。

だけれど、やっぱり俺が教育係らしく、ほとほと困っていた。

「因幡くん、大丈夫かい？」

大きな溜息を吐いていると、背後から声を掛けられる。

シルバーのトレーを脇に抱え、他のスタッフと談笑している美桜の姿を見詰めていた俺は、びくりと身体を震わせ急いで後方に顔を向けた。

其処には私服姿の如月が美しい顔を少しばかり歪め、俺の顔を見た後その視線をちらりと美桜に向ける。

苦笑を浮かべ、小さく会釈をすると如月は更に顔を顰めた。

「あんまり・・・上手く行ってないみたいだね」

言葉を選びながら視線を変える。その視線を受け溜息を吐いた。

「どうも・・・嫌われちゃったみたいですよ」

苦笑を浮かべながら答えると、如月は思った以上に怖い顔を見せ俺を見る。

「彼が何を考えてるのか解らないけど、問題があるなら音羽を頼りなさい」

厳しい表情だった。

でも……。

頼れないよね。なかなか逢えないうえに、忙しそうにしている姿を見てしまえば、自分の事で煩わせてしまうわけには行かない。如月は心底心配してくれているのは解っていたから、俺は曖昧に笑うに留めたのだった。

がちゃん、と大きな音がフロアーに響き渡る。

はつとなり音の元を確認しようと頭を動かすと、音を追いかけるように男の怒声が響き渡った。

「なんだその態度は!!!」

男の前にはさらさらの髪を揺らしている美桜が、綺麗な顔を皮肉気にしている。

俺はきりきり痛む胃を抑えながら急いで客の下に向かい、出来るだけ柔和な笑顔浮かべながら言葉を発した。

「お客様、如何されましたか？」

俺の登場に美桜の顔が違う意味で歪むのを、目の端が捉える。

俺に教わる気はない、と断言し言う事を聞かない美桜からすれば余計なお世話かもしれないが、他の客も居るのだ。事を穩便に運ばせ、おさめたかったから気付かないふりをし高そうなスーツの男を見た。男の顔が少し和らぎ、此方に視線を向ける。

その顔には見覚えがあった。

「ああ、因幡くん」

彼も気付いたようで、人懐こい笑顔を見せる。

「こんにちは、不破様」

横で不機嫌な顔をしていた美桜の顔が、今度は驚きが変わった。

空気が変わったのを肌を感じ、俺は再度不破に言葉を投げ掛ける。

「不破様。何か不手際がありましたでしょうか」

眉尻を下げ、少し困ったように笑いながら言うと、不破の顔も少し困ったように歪む。

「…いや、この子がね」

そう言い顎で美桜を示すと美桜の顔が不機嫌さを増すけれど、かまっていられない。

「はい、先日入りました新人の羽生と申します。羽生が何か？」

ふわりと笑顔を浮かべると不破は更に表情を緩めた。

「オーダーを間違えたのに謝りもしないで、舌打ちまでするから…」
そう言うと怒りが再燃したのか、怖い顔で美桜を見る。

舌打ち、とは何事かと怒鳴ってしまいたい気持ちを抑え、美桜を見るとふいと視線を逸らされた。

その途端、また胃がきりきりと痛む。飛び出して来そうな溜め息を飲み込み、深々と頭を下げた。

「申し訳ありません。監督不行き届きです。すぐにご注文の品をお持ち致しますので…」

そう言い、横にいる美桜の頭も下げさせる。

不破は片手を上げ、苦笑を浮かべながら了承してくれた。

再度頭を下げ踵を返すと共に美桜の腕をきつく掴み、強引に歩かせ。嫌がる美桜に振り払われそうになるけれど、掴んでいる手に力をこめそれを阻止した。

客には見えない所まで引きずり、そこで漸く腕を離すと美桜は鋭い声を上げた。

「何するんだよ！」

屈辱、とでも言いたそうな顔に今度こそ溜息を吐く。

「・・・羽生くん。俺の事が嫌いなのは解ったけど、店に迷惑を掛けるのとは違うと思うよ。不破さんは Beach Sound の常連なの。其れにある雑誌社のお偉いさんでもある。無いとは思っけ

ど、この店の事を悪いように書けば絶対的に影響を与える事もできる。君は馬鹿じゃない。・・・言っている意味、解るよね？」
怒りで真っ赤に染まっていた美桜の顔が青くなった。どうやら、意味が解つたらしい。

「今は店長も留守にする事が多いから、今すぐには無理だけど、そんなに俺と組むのが嫌なら店長に言っておくからそれまで我慢して問題を起こさないで・・・良い？」

念を押すように言うと、しぶしぶながらも美桜は頷いたのだった。

仕事を終え、大学と店の丁度間に借りたアパートに戻ると大きな溜息が出る。

静かな部屋で簡単な食事を摂ると、ふと美桜の不機嫌な顔が浮かんだ。

あの後、美桜はしっかりと不破に謝罪をし仕事に戻って行ったけれど、俺に対しての態度は何も変わらずつんけんとしている。途端に強い吐気が襲い、俺は慌ててトイレに駆け込んだ。

胃の中にある物を全て吐き出すと少し楽になる。

目に浮かんだ涙を拭いその場に座り込むと、ポケットに入れていた携帯が振動した。

画面に浮かんだ名前を見、少し口角が上がる。佐伯からのメールだった。

『忙しくて連絡もままならない。元気か？俺は千葉さんに連れられてあちこち行ってるよ。お前に逢いたい。抱きしめたいよ・・・。明日も大学だよな？あんまり無理するなよ。それじゃあおやすみ』
ところどころにハートマークの絵文字が描かれているメールに何故だか涙が溢れる。

「俺も・・・逢いたいです・・・」

文字にするには恥ずかしくて、でも溢れる想いを止める事が出来なくてぎゅっと携帯を抱きしめた。

ポロポロと涙が溢れ視界が霞む。このままだどつい電話をしてみたい、今すぐに逢いたい、と仕事で忙しい佐伯に言っでしまいで怖かったから、『ありがとうございます。おやすみなさい』とだけ文字を綴り送信のボタンを押したのだった。

視界が歪んでいる気がする。身体を動かすのがこつも億劫に感じられるのは初めてだ。

「因幡さん、こんばんわ」

バイト仲間が次々とロッカールームに入って来て俺に挨拶するけれど、その顔も何だか膜が掛っているみたいにはやけて見えて気持ちが悪い。

可笑しな感覚にイライラしながらギャルソンエプロンをもたもたと巻いていると、急にその手を掴まれた。驚いてその手を振り払おうとしたが、聞こえて来た声に力が抜けた。

「下手くそ。永久は何時までもコレ巻くの慣れないな」

笑いの含んだ声に、頬は緩む。そのまま顔を向けると佐伯が立っていた。

「佐伯さん」

呼びかけると笑顔が変わり、眉間に皺が寄った。そのまま肩を掴まれる。

痛い、と思い顔を顰めると怖い声が聞こえた。

「どうした？顔色悪いぞ？」

体調不良を悟られたらしい。俺は苦笑を浮かべ、視線を外した。

「ここ暫く店長が不在で大変だったんですよ」

少しの真実を交え誤魔化す。掴まれていた肩が少し和らいだ。

「悪かったなあ。千葉さんが煩くてね・・・」

苦虫を噛む潰したような表情をし、佐伯は俺の頭にぽん、と手を置いた。そのからふわりと暖かさが伝わる。それだけで、なんだか自分が悩んでいた事がとても小さな物に感じ、そうして具合も良くな

つて行くような気がした。

ふわふわとしてきて、少し身体を動かしてみる。途端に佐伯の匂いが増したような気がして、その身体に触りたくなった。

そっと手を伸ばし、あと少しであの逞しい腕に触れそうになった時だった。

ばたん、と大きな音がしたかと思うと美桜が姿を表す。美しいまでの顔が嬉しさで綻んだ。

「佐伯店長！」

そう言うのと小走りに近づいて来て、俺を押し退けるようにし佐伯の逞しい腕に絡み付く。

「お久しぶりです。店長がいなくて僕寂しかったですよ〜？」

聞いた事のない甘い声に、血の気がひくのが解った。ちらりと投げられた美桜の表情が、まるでざまあみろ、と言っているように見えて視界が暗くなる。

そうだったのか。

だから彼は俺の事が嫌いだったのか。

いったい何時から…？

そんな事を思いながら一歩後ずさる。

佐伯に対し小さく会釈をすると、踵を返し部屋から出た。背後から自分を困惑気に呼ぶ佐伯の声が聞こえたが、美桜の甘える声にかきけされる。

いつの間にか溢れてしまった涙を拭い、俺はフロアーに向かったのだった。

お話 3

「因幡つち！」

「永久！！」

フロアーに飛び出した俺の耳に、懐かしい声が響く。

視界を巡らせると、奥の丸テーブルに柊と慧が座っていた。手にはアルコールの入ったグラスを持っている。

ロツカールームでの出来事を振り切るように1度頭を振ると、2人に近付いた。

「お久しぶりです。柊さん、慧さん」

笑顔を浮かべたはずだったのに、慧の鋭い声が其れを散らせる。

「何があつた？」

静かな声だったけれど逃れる事を許さないかのような声に、表情が凍りついた。

「おい、慧……」

窘めるような柊の声に、しかし慧は怯まない。

「柊は黙ってて」

ぴしりと告げられた言葉に柊は苦笑を浮かべ、そうして俺の方へ視線を投げかけた。その視線に耐えられなかった俺は、其れを床に向ける。

コンッとグラスを置く音がし、続いて慧の溜息が聞こえた。

「……永久、酷い顔しているよ？それじゃあ、何も無いって言う方が可笑的いや」

自分はそんなに酷い顔をしているのだろうか。そっと自分の頬に手を当てて、けれどやっぱり解らない。

ただ解っているのは、さっきの出来事が思っている以上に尾を引いているって事だけ。

「佐伯さ」

「柊に慧じゃないか！」

何かを言おうとした慧の声を遮るものがあつた。

「くんばんわ、佐伯さん」

言葉を途切れさせられたのが気に入らなかつたのか、慧の挨拶が少し不機嫌な物なる。柊の溜息が小さく聞こえた。その2人の表情が一瞬で変わる。

眉間に大きく刻まれた皺に不思議に思った俺は、視線を佐伯に向け、そうして再び視界が歪むのが解つた。

「店長、誰ですか？」

佐伯の腕には、美桜がまだ絡まっていた。柊と慧の視線が俺に向けられる。

「・・・なに？どういう事？」

慧の声が戸惑いを含んでいて、そうしてどこか非難した物が含まれているような気がして胃が焼きつくようにキリキリと痛む。そうして異常なまでの痛みが襲い、目の前が真っ暗になった。

「！・・・永久！！！」

「永久！！！」

「?!・・・因幡うち?!」

がたん、と大きな音がしたかと思うと、3人の叫び声が出た気がした。

どこかふわふわとした感覚が襲つた。

身体が異常にだるくて、眉間に皺が寄る。

其れに、なんだか周りが煩くて、人の眠りを妨げるのは誰だ?!という怒りにも似た感情が湧いた。

「・・・佐伯さんがいけないんだよ！」

これは慧の声だろうか。久しく会っていなかつたと思っけれど、まさか夢に見るなんてどうかしている。

「落ち着け、慧」

これは柎・・・？妙に落ち着いてしゃべる人だな、と笑いそうになった。

「飯塚くん、落ち着いて」

ん？・・・この声は如月さん？

「諒あきさんが悪いんだ。音羽を引つ張りまわしていたからね・・・」
申し訳なさそうな声に、逆にこっちが申し訳なく感じる。

「だからって、永久を放つて置いても良いって事にはならないでしょう？！倒れる程具合が悪くなってるのに気付かないなんて、それでも永久の彼氏かよ！！・・・それにあいつ何者なんだよ！」

普段は可愛らしい話し方をする慧が言葉を荒げている。慧と初めて出会った時の事を思い出した。

「彼は 羽生 美桜くん。新人で因幡くんが教育係なんだよ」

静かな如月の声に、慧は更に声を張り上げる。

「ふざけるな！あいつ可笑しいだろ？永久が教育係だったなら、なんで永久の言う事を聞かない？！他のスタッフ締め上げて聞いたら、さんざん永久に悪態吐いたってゆうじゃないか！！」

その言葉に1番反応したのは佐伯だった。がたん、と音がしたかと思つと低い地響きのような声がある。

「・・・どういう事だ？」

しかし、それに返事をする者はいない。静寂に包まれた空間に、これは夢ではない事が知れた。

そうして思い出す。

今日、確か店に柎と慧が来たのだ。俺の顔を見た途端、慧に詰問された。何があつたのか、と。

そうして佐伯と美桜の姿を思い出す。途端に言い知れない悲しみと不安が襲い、2人の姿を見て自分は倒れたのだ。

ここは何処だ？

ゆっくりと重い瞼を押し上げると、瞳に白い天井が見えた。少し首を動かすと、見覚えのある家具が見える。どうやらここは、初めて Beach Soundでバイトをした時に住んでいた部屋だと知

れた。

そのまま逆方向に首を動かすと、再び佐伯の怖いまでの声が響いた。「なんの事だ？・・・おい、瑞希みずき！・・・なんの事だ。俺は何も聞いていない」

ぶわつと膨れ上がった佐伯の怒りが、びしびしと皮膚を突く。

「ばつかじゃねえの？！そんな事も知らないで、あんた本当に店長かよ！！」

「慧！やめろ！！」

霞がかつた視界が晴れ、飛び込んで来た映像に息を呑んだ。

慧の小さな身体が動いたかと思うと、慌てた柊が止める前に佐伯の頬を殴つたのだ。

まさか殴られるとは思っていなかったのだらう佐伯は呆然と慧を見る。

慧の可愛らしい顔にある大きな瞳から、ぼろりと涙が伝った。

「・・・永久は俺の親友だ。頼むから、大事にしるよ・・・」自身の身体を掴んでいた柊を振り払うと、慧はその場を後にする。

「・・・すみません、佐伯さん。・・・でも、慧にとって因幡っちは、唯一心を許せる存在なんです。色々あったあいつにとっては本当に親友なんです」

がばりと頭を下げ、柊は慧の後を追つたのだった。

2、3言葉を交わした佐伯と如月が部屋を出て行く。静かになった部屋で、俺は漸く身体を起こした。

“親友”

慧の放つた言葉に頬が熱くなる気がする。まさか自分が其処まで想われているなんて思ってもみなかったから、次に慧に会う時どんな顔をして良いのかわからない。

はーっと大きく息を吐いた時だった。

再び部屋の扉が開いたかと思うと、佐伯が姿を現す。驚いて視線を

向けると、同じく驚いた佐伯の表情があった。その顔が、ほっとした物に変わる。良く見ると、左頬が赤くなっていて、慧が殴ったのはやっぱり夢ではなかったのだと知った。

「あの・・・」

「良かった・・・」

お互い同時に声を発して、そうして黙り込む。その沈黙を破ったのは佐伯だった。ふーっと1つ息を吐きベッドに近付く。そうしてあの大きな暖かい手を俺の頬に当てた。

「具合はどうだ？・・・もう大丈夫か？」

優しい声に、感情が揺れ動く。笑顔であるはずの佐伯の顔は、けれど妙に憔悴しきっている。自分がとても迷惑を掛けてしまったのだと思うと、申し訳なかった。忙しい佐伯を煩わせたくなかったのに、結局これか、と思うといたたまれない。

ふい、と視線を外して小さく謝罪の言葉を告げた。

「・・・すみませんでした・・・」

「え？」

佐伯の困惑気な声がする。きゅっと唇を一旦閉じて、深呼吸をする。と逸らした視線を佐伯に向けた。

「佐伯さんが忙しいの解ってるのに、俺迷惑かけてしまつて・・・」
下を向いた俺の頬に痛みが走る。むにゅと引つ張られた頬に驚いて目を上げると、びっくりするぐらい近くに佐伯の顔があった。

「いらいです、しゃえきさん」

情けない声に、それでも佐伯の顔は変わらない。どうしたら良いのか解らずに、しかたなく眉尻を下げた。

「変な顔」

ふつと口元を緩ませ手を放してくれる。まだ少し痛む頬を摩って恨みがましい視線を投げかけてみた。

ふいと視線を外し、佐伯は小さな声で言う。

「・・・悪かったな」

呟いた言葉に意味が解らなかった俺は、小首を傾げ佐伯を見た。

「佐伯さん……？」

待っても何も言わない佐伯に呼びかけてみる。

「だから……お前を1人にして悪かった！それに、辛い思いさせたいだし……」

とつても辛い表情がそこにあつて、俺は急いで否定した。

「ち、違います！俺が力不足だっただけで」

突然視界が揺れる。力強い佐伯の腕が俺を包んだ。

「お前が倒れた時、心臓が止まるかと思った……」

肩に埋められた佐伯がくぐもった声を出す。その声が震えている気がして、胸がぎゅっと締め付けられた。

「辛い時はちゃんと辛いつて言ってくれ……。俺が忙しいからって、何も知らされずに其れを後で他の奴から聞かされるのは辛い……」

ああ、そうか。佐伯も自分と同じ気持ちだったのだと知り自然と言葉が溢れる。

「……俺、凄く辛くて……。勿論羽生くんの事もそうだけど、佐伯さんに逢えなかったのがとても辛かった……。彼の事を相談したかった。この間くれたメールも、本当は自分も逢いたいつて送りたいかったけど、仕事の邪魔になるんじゃないかと思ったら、出来なかった……。心配掛けて、ごめんなさい……」

ぎゅっと更に強く抱き締められて、そうしてそつと俺の事を離すと真剣な眼差しが向けられた。

「俺に永久を守らせてくれ……」

小さく呟くと、端正な顔が近付いて来てそつと口付けされた。

久しぶりの甘いそれに、一瞬でメロメロになってしまう。何時の間にか深い物に変わった口付けに翻弄され、やがてその息もあがっていく。

ゆっくりと身体を押し倒され、そうして唇を放した佐伯は小さく笑った。

「ほれ、美桜！」

目の前に美桜の不貞腐れた顔がある。その横では、まるで首根っこを掴んでいるような格好で佐伯が立っていた。

「ちゃんと永久に謝れ」

一時の住処であったあの部屋で久しぶりの逢瀬を堪能した俺に、佐伯はとても驚く話をした。

美桜の事だ。

彼は、実は佐伯の友人の弟らしい。

その容姿はとても美しく、色々な人間にちやほやされ育った為か妙に曲がった性格になってしまったらしい。曲がった、というかなんというか……。

つまりはとても天邪鬼らしい。

じつと顔を見詰めると、ほんのりと頬を染めふいと顔をそむけた。

思わず苦笑が零れる。

ある日、美桜は兄に連れられて Beach Sound に客として来たらしい。

そこで、どうやら……“俺”に一目惚れしたらしいのだ。お兄さんが、佐伯の恋人だと教えたけれど気持ちを抑える事が出来なくて、バイトに来た、と言うわけらしい。

本当に俺の事を好きなのか？と疑いたくなるあの態度は、天邪鬼が為せる技のようだった。

「えと……佐伯さん、もう良いですから」

苦笑を浮かべ告げると、キッと美桜が顔を上げる。その顔が急に涙に変わった。

「因幡さん……すみませんでした……」

小さな声だったけれど、しっかりと聞こえた謝罪に、俺は大きく頷いたのだった。

段ボール箱に入った衣類をひっぱり出す。

ぐるりと部屋を見回し、小さく息を吐いた。8畳の洋間には立派なベッドが備え付けられていて、その横にはデスクまである。以前の部屋とは比べ物にならない程広い部屋に驚きを隠せないでいた。荷ほどきに悪戦苦闘していた俺の耳に部屋をノックする音が聞こえる。

「永久、一休みしないか？」

佐伯の声だ。

店で倒れた俺を、もう1人にはできない、と豪語した佐伯は同居を再度申し出たのだ。

もう、渋る理由もなくなった俺は笑顔でその申し出を受けた。

それから1月。

今日、無事に引っ越しが終わった俺は急いで返事をし部屋を後にする。

広いリビングには引っ越しを手伝ってくれた如月、柊、慧、そして美桜の姿がある。

「永久！」

笑顔で慧が俺の腕を引き、リビングのテーブルに付かせた。

Beach Soundに来てもう直ぐ4年になるうとしている。

俺の周りには沢山の人が、俺の事を大切に見守っていてくれた。

今度は自分が見守る番だ。

目の前に広がる料理に手を合わせながら、俺は心に誓ったのだった。

e n d

お話 3 (後書き)

ショートストーリーでしたが、少しでも楽しんで頂けていたら・・・

と、心から思っています。

最後に、稚拙な文章を最後まで読んで下さった方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0303p/>

Beach Soundの恋～佐伯,永久のその後～

2010年11月28日17時23分発行